

サーカス — 異種・異物陳列の スペクタクルを巡って —

慶應義塾大学名誉教授 石井 達朗

近代サーカスの誕生

伝統的なサーカスのテント空間。それは椀状の客席が階段のように広がっていて、その椀の底にあるのが円形のリングである。リングもテント空間も、はじまりも終わりもない円環構造である。テントの大きさに関わらず、このテントを支える構造は近年ますます複雑になっている。何本もの鋼鉄の柱があり、その間を円環の曲線を見下ろしながらさまざまなロープが張り巡らされる。ハガネ、麻、化学繊維などでできたロープは、1本1本がそれぞれの意志と目的を与えられている。テントの生地や色、麻やハガネのロープの感触、隣の客と体がくっつく座り心地の悪い長椅子、埃っぽく軋む床、子供からお年寄りまでを含めた声のざわめき—そのすべてが身体に密接している。サーカスの空間とは、そこに入ったときからすでにフェティッシュなもの（官能的快感）である。

このフェティッシュな楽園をさらに完全なものにするのが、動物たちである。最近動物の数が極端に減ったり、動物の全くいないサーカスが多くなったが、もともとサーカスのテントの内側にも外側にも動物臭はつきものだ。サーカス芸を構成する主な3要素は人間のアクロバット、道化芸、それに動物芸である。人が動物に芸をさせて見世物とすることはいつごろから始まったのか。人の曲芸に関しては、綱渡りなどが数千年も前から行われていた形跡が古代エジプトや中国にある（中国雑技に関しては、傳起鳳・傳騰龍『中国芸能史—雑技の誕生から今日まで』岡田陽一訳、三一書房に詳しい）。動物の芸を見せるといっても、紀元前を遠く遡る昔からあったと想像できる。

ただし、円形のリングを取り囲んで、動物や道化師を含めたさまざまな芸のページェントを開演するようになったのは意外に新しく、イギリスのフィリップ・アストレイが直径13メートルのリングに馬を走らせ見世物とした一七七〇年頃である。

アストレイはリングの直径を42フィート（12.8メートル）とし、これが多かれ少なかれその後の世界のサーカス団に引き継がれる。移動するサーカス団にとって、リングの大きさが一定していたほうが、馬にとっても馬と一緒に芸をする人間にとってもやりやすい。馬の背で芸をする芸人にとってこのくらいの長さがちょうどいいとアストレイは考えたようだ。走って回る馬の背に、体をリングの内側に心持ち傾けて立つと遠心力で芸人

の足がピタッと馬にくっついて、体勢を維持するのを容易にする。また、この直径は、真ん中に調教師が立って回転する馬にムチを振るときのムチの長さからきたという説もある。

いうまでもなく、サーカスは曲芸・アクロバットなどと同義ではない。サーカスとはそれらを含め、そこに道化芸や動物芸が加わり、それらすべてが見世物として供されるところこのトータルなパフォーマンスのことである。サーカスに欠かすことのできないもうひとつの要素は、行為のすべてが円環構造のなかで展開するということである。以上のことから近代サーカスの誕生はアストレイにあるとすることができる。

近代サーカスの誕生、それは曲馬にある。曲馬こそ近代サーカスの原点なのである。曲馬だけでは飽きるので、曲馬とは関係のない他の様々な芸をあちこちに散りばめて見せるようになる。一種のパラエティショーとしての見世物である。アストレイに始まる近代サーカスは最初から互いに関連のない異種・異物を陳列するというスペクタクルとして出発し、国や地域やそれぞれのサーカス団がそのスペクタクルのユニークさを競うようになるのである。

フリークショー

18世紀後半、イギリスに誕生した近代サーカスは、19世紀半ばになるとアメリカにおいても盛んになってくる。その中心人物は、アメリカの歴史上最大の興行師といわれるP.T.バーナムである。しかし、舞踊史上最大の興行師であるディアギレフについて語られるのとはちがいで、バーナムに対しては舞台芸術オーガナイザーとしてある種のリスペクトをもって語られることがない。20世紀初頭、ニジンスキー、ココ・シャネル、ストラビンスキー、ジャン・コクトー、ピカソなど当時の才能を結集して現代舞踊の新しい時代を告げたディアギレフは、バーナムと同じ「歴史に残る興行師」といえる。しかし、芸術的なセンスではバーナムはディアギレフの足元にも及ばない。

バーナムが大成功するきっかけとなったのは、いわゆる「奇形」見世物なのである。つまりその時代に人体の「奇形」とされるものを見世物にするという、現在から見ればきわめて差別的な意図が根底にある。人権という意識が国際的にも広く流布している現在、この種の慣習はほとんど見ることができない。ただしこれは姿形を変えて「フリークショー」とかサイドショーと呼ばれるものとして数こそ少ないが残存している。1870年代バーナムはこのような「奇形」見世物と動物芸、それに加えて人間のアクロバットを統合し、他の小さなサーカス団吸収して自分のサーカスと合体させ、これが文字通りの「地上最大のショー」(The

Greatest Show on Earth) に発展してゆく(フリークショーに関する歴史的な研究をした書物として、Robert Bogdam, *Freak Show: Presenting Human Oddities for Amusement and Profit*, The University of Chicago Pressが良書)。

劇映画ではあるが、当時の「奇形」見世物で働く、いわゆる「フリークス」と呼ばれる人々が「健常者」であるとされる芸人たちに復讐する映画『フリークス』は、まるで記録映画のようにこの世界に生きる当時の芸人たちの姿をとらえている。この怪作を撮ったトッド・ブラウニング監督は、本作1作により映画史上に名を残すことになる。この謎の監督とその特異な映画の背景に関しては、デイヴィッド・J・スカル他『フリークスを撮った男: トッド・ブラウニング伝』遠藤徹他訳、水声社に詳しい。

クロスオーバーのスペクタクルとして蘇る

サーカスという巨大な集団移動のシステムは、1930年代、40年代からじょじょに衰退の道を歩むようになる。これにはいろいろな理由がある。映画という革新的なメディアの出現、旅行を含めた娯楽産業の一般化と多極化、またサーカス団の現実的な問題として、動物を連れて大人数が大移動し、テントを設営して公演するということが急速な近代化の実情にあわなくなってきたのだ。サーカスは、情報化社会のなかで次第に一九世紀的な遺物として時代の変化に取り残されていたのである。

20世紀におけるサーカス低迷の数十年。ところが、1980年代以来サーカスはドラマチックに復活する。その中心はカナダのシルク・ド・ソレイユ、そしてフランスに数多く生まれた小さなパフォーマンス集団としてのヌーヴォー・シルクである。カナダのモントリオールに生まれたシルク・ド・ソレイユは、もともと欧米の都市であるならどこでも見られるような大道芸から出発して、みるみるうちにディズニーランドを思わせる超大な興行形態をとるほどに成長した(日本にも常設の劇場ができた)。シルクの成功の秘密は、作品にファンタジックなテーマ性をとりこんだことに加えて、ライブのサウンド、照明、衣装のデザイン、そして芸人たちの斬新な芸の数々、それらのすべてをアーティストックな装いのなかに包み込んで、アートフルであることとエンターテインメント性を融合させたことにある。そうすることによりシルクは必然的にかつてなかったような老若男女、多様な観客層を開拓することになる。ロックコンサートにしか行かない若者も、ダンスや演劇ファンの若者も、とくに劇場には足を運ばない中高年層も同時にテントの下に呼び込んだのである。見方を変えれば、肥大した消費社会が生み落とし

た、世代を問わずアピールする快樂のシステムであるともいえるのだ。

わたしがとくに注目したいのは、シルク・ド・ソレイユよりも「ヌーヴォー・シルク」と呼ばれる80年代前半のフランスに始まる現象である。演劇、ダンス、オペレッタ、ミュージカルなどのスタイルに巧みにアクロバットを融合させながら、まったく自由で个性的で、いかなる伝統にもとらわれないクリエイティブな小サーカス団が次々に誕生した。このような現象を可能にした背景の一つとして、1985年にフランスのシャロンというところに国立のサーカス学校(CNAC, Centre National des Arts du Cirqueの略)が設立されたということがある。演劇や舞踊を専門学校や大学で学ぶように、ここでサーカス芸全般について若者たちが集中的に学び、卒業後には既成のかたちに囚われることなく多様な方法論を模索しながら、新しいパフォーマンスのスタイルをつくっていったのだ。日本では考えられないことだが、デザイナーや歌手や俳優になりたいという子供や若者がいるように、サーカス芸人になることを夢見る子供がこの国にはいる。ヌーヴォー・シルクに魅せられた日本女性が現地取材に膨大な時間と労力をかけ完成した本がある。田中未知子『サーカスに逢いたい: アートになったフランスサーカス』現代企画室。

もうひとつ、ヌーヴォー・シルクとは別の範疇に入るが、2度の来日公演を果たしているジンガロというグループの出現も、サーカスにおいて動物芸が衰退しきってしまった今、興味深いものがある。動物芸といえば、人間があくまでも上にたち動物を調教するというかたちの、人と動物との厳然たるヒエラルキーが芸を生み出す原動力になっていた。これに対して、ジンガロを率いるバルタバスは、人間と動物との親和力そのものをパフォーマンスにするというかつてなかったことを実現したといえるだろう。現在、バルタバスと舞踏家の室伏鴻との共演に向けた作業が進行していると聞く。これが現実のものとなれば室伏の舞踏とバルタバスと馬という、今まで考えもしなかったコラボレーションが展開するはずである。

サーカスでは、その発生当初から現在に至るまで、多様な価値観、多様なジャンル、人間と動物がクロスオーバーする大衆的なスペクタクルとして機能してきたのである。